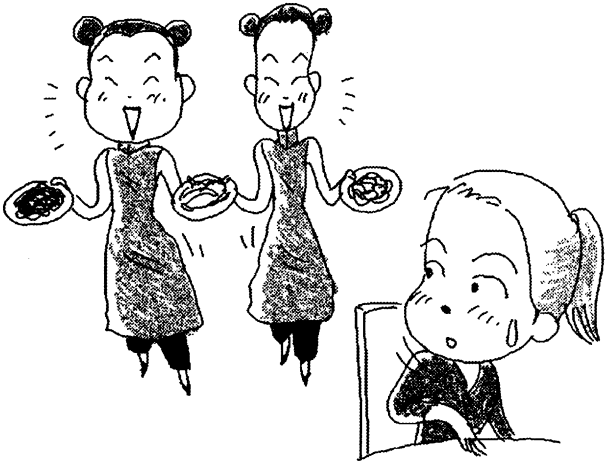
異文化と心通わせ ⑲

村田　佳子



子供のころから親戚とは中華料理屋さんで集まることが多いものでした。久しぶりに少し年上の従姉妹たちに会う時は、大人っぽくなった彼女たちの様子にあこがれを抱きつつも、恥ずかしくて一瞬何を話していいか分からなくなっていました。何かのきっかけで相手の変わっていない部分に触れて安心し、自分も一丁前に会話に交ざって発言ができると少し大人になったような気がしました。

そんな楽しい想い出があるせいか、単に食いしん坊なだけなのか、今でも中華料理屋さんに行くのが大好きです。

ゴールデンウイーク中も横浜・中華街に行きました。その朝、東京都内に住む従姉妹からたまたま休暇をどうしているか尋ねるメールが携帯電話に届きました。中華街に向かっていることを伝えると「中華街ならこのお店。カニの汁なしソバを食べるべし！」とそのお店の電話番号が返信されました。いろんな情報に詳しいのは知っていたけれど、中華街にまでアンテナがあるとは驚きでした。

わがままとリクエスト

中華街にはおいしそうなお店が並び、いつも迷う夫と私にとっては何よりの情報でした。予約のためさっそくそのお店に電話し、カニの汁なしソバについても尋ねてみると、近くの支店では出しているがそこではメニューとしては出していないとの返事。「そうか…じゃあその支店に行こうか」と考えるより早くお店の人は「デキマスヨ」と軽くいうのです。

発音で中国の方だとわかりましたが、「無理なところを頑張ってやります」というような返答ではなく、とても軽やかに引き受けてくれたのです。ほかにも食材と味付けの注文をすれば、メニューになくても作ることにしていると話しました。わがままをきいてくれるお店（ということは従姉妹もわがままを!?）。

予約通り店に着いてガラガラと戸を開けると、入り口には魚や野菜が市場のように並んでいました。その横の階段から少々無愛想な女性に2階に案内されました。中華街では店員同士が談笑しながら料理を運び、テーブルにドンと置くなんていうことはよくあって、最初は拍子抜けしましたが、そんな無愛想さも旅行気分を与えてくれます。無愛想なサービスなど忘れてしまうほどおいしいのだから、やっぱり中華街には魅力があります。その女性に電話で伝えた注文について確認すると用意しているとのこと。あらためてお店の寛大さに感謝していると間もなく待望の品が来ました。

これかあ！　おいしいカニと麺を堪能しながら「ああ、このお店にきて良かった」と幸せな気持ちで箸を進めていると、目の前でおいしそうにパクパク食べていた夫が「中国の人ってさあ、よく何でも言ってきて、ずうずうしく感じる時もあるけど、意外と何言っても聞いてくれるんだよね」。夫は同僚だった中国の男性を思い出しているようでした。そして「だから同じように彼らも何言ってもいいんだと思って、とりあえずリクエストしてくるのかもね。でもいざそれを日本人に伝えてみると『それは困ります！』って受け入れられないこともあって、実際『あれっ？』って思ってるかもね」。

なるほど。自分にできることは相手にも可能だと思ってしまう。そして自分にできないことを言ってくる人はわがままに思える。特に外国人との間ではその許容範囲の違いからそんな思いを多々経験します。わがままではなくて、とりあえずリクエストしてみただけだったんだろうな。相手の寛大さ、「ゆるさ」に許してもらっていることがたくさんあるのだと気付きます。

（鶴岡市出身、コーチング・システムズ）